

発達保障の道

～歴史をつなぐ、社会をつくる

【第9回】

人間の痛苦と人権の思想



金沢大学
河合隆平

かわい りゅうへい
1978年福井県生まれ。金沢大学准教授、全障研常任全国委員。専門は、障害児教育学。著書に『発達保障ってなに?』共著（全障研出版部）など。

今年7月共謀罪を含んだ改正組織的犯罪処罰法が成立・施行されました。人びとは自分たちの社会について語り合う自由が奪われると小さく閉じた世界に孤立していき、社会の空気は少しずつ冷え込んでいきます。戦争への熱気はそこに一気に吹き込んでいきます。今回は、戦争へとなだれ込んでいった冷たく暗い時代に、社会変革を求めながら若い命を終えた一人の女性のねがいと苦しみのなかに、発達保障へとつらなる人権の思想をたどってみたいと思います。

伊藤千代子の生い立ちと社会変革への意志

伊藤千代子は1905年7月、長野県諏訪郡湖南村（現在の諏訪市南真志野）の農家の長女に生まれ、幼くして母、父と別離し、養祖父母、実祖父母に育てられます。大正新教育の流れをくむ白樺派の教師たちの自由教育が、少女千代子の個性と自立心を育みました。物静かですが聡明で成績抜群の彼女は、1918年、県立諏訪高等女学校に進みます。自由な校風のもとアララギ派の歌人教師土屋文明から英語や国語の手ほどきを受け、語学を学んで世界を広く見渡したいとの思いをかき立てられます。卒業後は上諏訪で小学校代用教員を2年間勤めたのち、仙台の尚綱女学校高等科を経て1925年、東京女子大学英語専攻部2年に編入学しました。

千代子は勉学と読書に打ち込むいっぽう、学内に発足した「社会科学研究会」に参加し、マルクス主義と出会います。当時「社会科学」といえばマルクス主義をさしました。法学、政治学、哲学、経済学などの個別の学問を相互に関連づけて社会の現実を総合的にとらえるマルクス主義は学生にとって魅力的であり、かれらの思想形成に強い影響力をもちました。

ロシア革命の成功は社会主義の火を世界に広げ、日本

でも資本主義に服従を強いられてきた労働者たちが団結して自己主張を始める時代でした。千代子も社会の矛盾をつかみ出す理論を吸収することで、労働者や貧困に苦しむ人の側からの社会変革をめざしていきます。郷里諏訪の製糸女工の労働争議にも応援に入り、女子学生運動の一翼を担っていた彼女は、1927年秋に学外の学習会で知り合った日本共産党員の浅野晃と結婚、年明けには自らも入党し、党活動に身を投じていきました。

社会の不条理を引き受けて生きる

1928年2月、普通選挙法（男子のみ）による最初の衆議院総選挙が行われると、非合法の共産党も労働農民党から候補者を立てて大衆の前に躍り出ました。このとき見に懇願された彼女は、祖母から仕送りされた学費を選挙資金として手渡すのです。結局授業料が納められず、祖父母のねがいに背いて卒業を断念することが、どれだけ悲しく苦しいか。その頃郷里のいとこ岩波八千代にあてた手紙には無念の情を断ち切り、資本主義社会の不条理をわが身に引き受け、その克服を自らの生きる道と定めた彼女の不屈の意志が焼きついています。

これからこの社会に生き、この社会で仕事をしていくとするとする青年男女にとって、真に真面目に生きようとするればするほど、この目の前にある不公平な社会をなんとかよりよいものとしようとする願いはやむにやまれぬものとなってきます。私の勉強もそのやむにやまれぬ所から生まれてきました。私は強い確信を以つて、正しい勉強をし、やがて皆様への御恩がえしになるようなものになる準備をしていることをあなたに信じていただきたいと思います。

そんな千代子に国家の手が及びます。1928年3月15日早朝、千代子は治安維持法違反容疑で逮捕されます。総選挙で躍り出た共産党を警戒した政府官憲は特高警察を総動員して、日本共産党とその外郭団体を全国一斉に検挙したのです。この「三・一五事件」では1道3府27県にわたり約1600人が検挙され、約480人が起訴されました。

1925年に公布・施行された治安維持法は、「国体」の変革と「私有財産制度」を否定する結社、直接には天皇制と資本主義に反対する共産党の弾圧を目的としました。1928年に最高刑を死刑に引き上げ、「目的遂行罪」を新設。1941年の大改悪で条文は7条から65条に膨れあがり、「予防拘禁」制度を導入します。治安維持法は共産主義や社会主義にかかわる思想・運動に飽きたらず、反戦平和を訴え人権や自由を求める人びとをひねりつぶし、個人の思想を弾圧する最大・最強の武器となりました。弾圧の手は学術や芸術、宗教、民間教育運動にも及び、子どもに生活の現実を見つめさせようとした綴方教師たちも逮捕されました。

獄中でのやっやったくまじさ

滝野川警察署に連行された千代子はすさまじい拷問を受けても一切口を割らず、傷だらけのまま未決囚として市ヶ谷刑務所の女子舎独房に収監されます。やがて体調が回復すると獄中の同志と密かに連絡をかわし、差し入れられた社会科学文献の学習に励み、一斉保釈申請を呼びかけるなど、獄中の革命運動を背負っていきます。

同志への気配りと励ましを欠かさず、当局や看守に待遇改善を求めていく姿は獄中の希望であり、獄外の同志にも手紙で獄中生活を伝えて激励しました。三・一五事件で逮捕され千代子と獄中をともした原菊枝の手記